

地球時代と地域の時代：地域から教育文化を開く

Opening the Local Education and Culture to the World

堀 尾 輝 久* 小 川 勝 一**

Teruhisa Horio Shoichi Ogawa

はじめに

2002年度長野大学総合科目（前期）は「地域から教育文化を開く」がテーマである。その総論として、「地球時代と地域の時代」を堀尾輝久に講義をお願いした（4月11日）。この講義は履修している学生、社会人からさまざまな反響を受けた。また受講できない多くの方々、研究者からも強い関心を持ち、その内容を公開する要望が出されるようになった。内容が研究的、社会的意義が大きいと考え、堀尾輝久の講義を「本論」（一～三）、今回の総合科目の企画に係わり、この講義の方向をフォローしている小川勝一の小論文（問題提起）を「資料」として提出することにした。

一、

総合科目第1回の講義にお招きいただきまして、長野大学の諸先生へ感謝したいと思います。そして、参加された皆さんにお礼を申し上げます。

総合科目の最初の講義ということで、全体のテーマが「地域から教育文化を開く」という、これが前期の講義のテーマでございます。私がとりあえず準備をしたレジメは皆さんのお手元にあると思うのですが、最初に「地球時代と地域の時代」というふうに書いてございます。現代をどう捉えるか、私たちは今ここという時間と空間に限定された中で生活をしているわけですが、今ここというこの場所、そしてこの時間は同時に過去に

つながり、そして未来に開かれている。さらにこの地域は日本全体、さらにアジア、そして世界へと開かれていっている、つながっていく。そういう今ここでこの問題を考えよう、その基本の考え方に軸になるもの、どこに足場を置くのかということが私は大変大事だと思っているのです。

地球時代とグローバリゼーション

例えば、地球時代という言葉、これは新聞などでも結構使われています。しかし、それをどういう内容として捉えるか。その軸に日本、そして地域、そこに住んでいる自分をおいて、そして地球を考えるのと、なにか世界全体がいわゆるグローバリゼーションということでボーダレスな世界になっている。グローバリゼーションという言葉がある意味では現代を捉えるひとつのキ・コンセプトになっているわけですが、そのグローバリゼーションというのは、よく中身を見みると、それはやや誇張した言い方に聞こえるかも知れませんが、アメリカを軸に、アメリカ的な価値観の世界支配、もっと具体的にはそれは経済、そして金融資本、それと先端技術、そして多国籍企業、これが結びついた経済が世界に広がっていく。それは世界支配でもあるわけですが、それをグローバリゼーションというふうに言っていて、これは避けがたい事なんだとして、日本でもグローバリゼーションということが積極的な意味を持たされて使われることが多い。あるいはその是非はともかくその流れに乗らないと、

*中央大学教授

**産業社会学部教授

日本はやっていけないではないか。そしてそのグローバル化というのにはまさに世界規模での大競争の時代もあるわけで、その競争に打ち勝つそのために経済、政治、そして教育を大きく変える必要があるのだと、こういう動きの中で地球規模の問題というのは意識されているところがあるわけです。

でも私が地球時代というふうに考えようと思っているその時代というのは、必ずしもそういう動きをそのまま肯定的に使っているわけではない。むしろ、そのグローバル化なるものが、今申しましたように、アメリカ極のこの経済秩序、そして新自由主義的な発想ですべての地球規模での経済のネットワーク、そこに市場の原理が入り込んでいく。大競争の時代、そしてそこで考えられている平和もまたアメリカ極のいわゆるパックス・アメリカナといわれているような動きになっている。

この問題は特に昨年の9月11日以降の世界のいわば戦争と平和、あるいはテロと報復戦争といってもいいですけども、そういう状況を見ていけば、この今のいわばアメリカを軸とした、イスラエルもその流れの中にいるわけですけども、そういう動きが果たして世界の平和を築くということになるのかどうか。グローバル化とパックス・アメリカナが果たしてそれぞれの地域の人間に本当に幸せをもたらすのかどうかというそういう問い直しが求められてもいるわけで、私は地球時代という言葉を実はひとつの定義をもって使うことにしております。

地球時代とは

どういう意味で地球時代という言葉は私を使うかというと、「この地球上に存在するすべての人々、そして人間と自然、その環境を含めてひとつの運命的な絆によってつながれているという、そういう意識や感覚、それが地球規模に広がっていく、そして共有されていく、そういう時代を地球時代と呼ぶ」というふうに私は定義しながら使っているわけです。ところでその地球時代というのは、いつからなのかということで、私は1945年を非常に大事な時期区分だと実は考えていて、この1945年8月15日、日本においてはその歴史的

な時点が、いうならばそれ以前の時代とその後を区切る大きな時代区分になっていくわけです。それは例えば戦争と平和の問題にしても、第二次大戦がまさにトータルウォーとして全体戦争として戦われ、そして、しかもその戦争がヒロシマ・ナガサキをもって終わった。そして核の時代に入っていく。戦争もこれからはできない時代になっていく。新しい平和の秩序をどう作るかということで、国連も生まれ、そして核に対する世界の民衆の思いも共有されていくということがあるわけで、その際、日本が被爆したということは、その被爆体験をまさに世界の人々の共有の経験にしていく可能性を含んで核時代が開かれていく、核時代へ向かう人間の意識というものが作られていくということにもなるわけです。地球時代というのは、きれいごとというよりも、むしろあの戦争が終わり、そして核の時代に入ってくる中で、そして戦争でも起こればもう地球は滅びてしまうという危機意識の中で、地球というものが意識される。あるいは環境汚染の問題を通して、地球時代ということが非常に意識されるようになりました。これは新聞などでは特に1990年代リオデジャネイロでの環境世界会議の頃新聞などで地球時代という言葉が使われるひとつのきっかけになっていますけれども、しかしこの環境問題ということは別に90年代に始まったわけではなくて、例えば戦争というのは、まさに環境破壊の一番大きなものですし、それは皆さん、アフガニスタンの状況を見れば、あの報復戦争なるものがいかに環境破壊をしているか、勿論人間の命を奪っているわけです。さらに繰り返される核実験は大企業のいわば公害問題と重なり、環境汚染の大きな原因になってきたことは間違いないわけです。

そういう否定的なものを媒介にしながら、この地球上の生命、そして人間と自然の関係を含めて捉えなおさなければならないという、そういう意識が生まれてくるわけで、したがって私は1945年というのがひとつの大きな歴史区分としていいだろうと思っています。さらに地球時代、積極的な意味もまた持っているわけで、この地球というものがひとつの宇宙に浮かぶ惑星のひとつとして、宇宙のシステムのひとつとしてあるということも、この科学の前進の中で、つまり宇宙科学がこ

の地球というものを外から見る目を私たちに与えてくれてもいるわけで、最初にスプートニクが上がり、有人宇宙船でガガーリンが最初に地球を回ったのですが、そのガガーリンという一人の人間の地球を外から見たそのまなざしというものを、今では私たちは共有することができているわけです。別に宇宙船に乗らなくても、それは疑似体験ではあるけれども、しかし同時にそれを共有できる、経験にしている。地球を外から眺める目というのは、今や日常生活の中でも、つまり天気予報を通して私たちが活用もしているわけで、その度に地球を外から見るまなざしを私たちは持っているところということにもなるわけです。

そういう地球時代、そこに存在するものがひとつの運命的絆によってつながれているというような感覚、それが世界中の人々に共有されていく。それは否定的な要素を媒介にしながら、同時に新しい人間と自然の関係をどう作るのか、人間と人間、そして国と国の関係をどう作るのか、そこには積極的な、いわば平和や、あるいは安全や正義、そういった理念を媒介にしながらの人間と人間の関係、そして自然と人間の関係の作り直しという、そういう課題を含んで地球時代という言葉は私は使おうとしているわけです。

そういう見方からすると、「現在」は時期区分としては1945年からといいましたが、私たちは今、50数年も経て21世紀にいるわけだけでも、まだ依然として地球時代の入り口をもたもたしていると言わざるを得ない状況であることも確かです。

戦争と平和の問題、あるいは地球環境の破壊の問題にしてもそうですし、あるいは人権の問題にしても、すべての人間が人間としての誇りを大事にされるような世界秩序というものができていないわけです。そこでこの21世紀の課題を私はその地球時代に相応しい、教育の課題として平和、人権、そして共生の文化をどう作るかという、そういう方向で考えようとしてもいるわけです。

この教育の改革の課題もまた本当に21世紀に相応しい教育をどう作るかということになるというと、まさに地球時代に相応しい価値観を我々が共有していくという、そういうことこそ教育改革の名に値するのではないかというふうに考えていま

す。しかし他方で教育改革というものが、政府財界主導で声高にいわれているわけですが、その教育改革論というものが果たして、この地球時代に相応しい、あるいは21世紀に相応しい改革であろうかというふうに問い直してみると、とてもそうは言えないのではないかという思いを私は強く持っています。

戦後総決算論と教育改革

戦後総決算論と教育改革というふうにレジメには書いておきましたけれども、今声高にいわれている教育改革、これは実はもう70年代からある意味では繰り返されている筋の上に乗っていると書いてもいいわけで、「第三の改革」という言葉が70年代の初めに使われました。この第三の改革というのは、日本の歴史に即して、第一の改革が明治の教育改革、第二の改革が戦後の教育改革、第三の改革は戦後改革を総決算する、そういう方向で第三の改革というものを考えなければいけない。この言い方は実は70年代の初めに言われたのですけれども、80年代、90年代、そして今またそれが憲法の改正問題とも絡みながら非常に強く言われてきている。21世紀に入っただけに、50年前の憲法や教育基本法がその時良かったにしても、今や古いではないか。21世紀に相応しい憲法や教育基本法というものを我々は作っていかねばいけないんだという、こういうある意味では、なんとなく分かりやすい議論の中で、憲法、教育基本法改正が言われ、そして現在の教育に様々な矛盾や問題がある。その矛盾や問題点というのは、それを支えているのが教育基本法なんだから、教育基本法を変えなければいけないという議論になっているわけですが、しかし、その21世紀像というものが、先ほどもちょっと言いましたが、このグローバリゼーション、そして大競争の時代、その大競争に打ち勝つ、少なくとも生き残る、そのためには人材の開発がなによりも重要である。教育のシステムは一方で、そのトップのエリートをどう再生産するか、確保するかということが課題になる。例えば、いま大学問題でも、いわゆるトップサーティーという言い方がされています。つまり日本の大学、各研究領域でトップ30を選んで、そしてそれに重点的に文教予

算も出す。そのトップサーティーという目標の元で各大学がそれに入るかどうかの競争にもなっているわけですし、さらに私学を含めて今度は生き残りのためにどうすればいいかということで大学問題も振り回されている。教育改革の問題は決して幼児教育から高等学校までの問題ではなくて、高等教育、大学院問題を含んで、改革、改革といわれています。その構造が基本的には競争の原理を軸にして、そして強いもの、優秀なもの、これには十分な保障もするし、刺激も与えると、一方社会的秩序を壊さない国民、公に奉仕する国民をどういうふうに作るのかというところが、いうなれば義務教育の課題にもなっている、というような構図の中で動いているわけで、この構図は地域から見れば、果たしてどう見えるのだろうかというふうに問い直す必要があるのだと思います。

二、

地域からの視点

この地域での教育改革は、一方ではその大きな政策的な路線がそのまま地域に下りてくる。そしてその動きの中で振り回されるとこういうことが当然あるわけですが、しかし、同時に地域のあり方というものが、かつてのように中央と地方と直結させて、地方は中央の意向に従って動けばいいという、そういうことでも必ずしもないわけで、むしろ分権化の時代ということが同時にいわれている。グローバリゼーションと分権化、これが政策的に進められているキーポイントだというふうに言っていると思うのですけれども、その分権化というのはどう考えたらいいか。地域を考える場合にこの分権をどう考えるかということがひとつの重要な問題になっていくのだと考えています。

この地域から教育文化を開くと言うのが全体のこの連続講義のテーマでもあるようですけれども、私自身、一方で地球時代をどう考えるかという大きなパースペクティブで物事を考えているのですけれども、しかしこういう議論だけをしていると、自分の足元というのはどこにあるのかということ、ともしれば失いがちになるという危険性もあるわけです。地球時代を本気に語るためには、実はどこに足場を求めているのかという、そのことをしっかりと見ておかないと地球時代も実

は空疎なものになる、こういう関係もあるわけですね。

そこで、与えられたテーマとの関係もあるし、それから地球時代を考える私として、同時に地域の時代という問題をそれに重ねて捉えなければ、地球時代も空疎のものになるという思いを私自身持っていますので、この機会に、地域とはなんなのかということ、を少し考えてみようと思って準備もしてきました。しかし、考えて見ると本当に難しい問題です。地域とはなんなのか。とりあえずは一人ひとりがそこで生活して生きるその生活基盤、そして地域を問うことはその生活の質を問うことだというふうにとりあえずいうことができると思うのですが、しかし、その地域が問われているということは別の言い方をすれば、地域がなくなっているということでもある。

地域の解体、あるいは地域の崩壊と言う言葉もよく使われる。だからこそ地域をどう作り直すかという課題が、実は自分たちの生活をどういうふうに見直し、その質を豊かにするために必要かという問題が出てきているわけです。その問題と関わって、二つ私は問題の筋を大きく考えてみたいと思うのですが、なくなったということと関わってひとつの問題は、中央と地方という問題の中で地域がなくなっている。それからもうひとつ、その問題と深く関わりながら、私たちの生活自体が流動化している中で故郷が失われている。この二つの問題について少し考えてみたいと思っています。

中央と地方

最初に中央と地方というコンセプトの中での地域の問題、これはこの表現がすでに意味していますように、中央と地域ではなくて地方になっているわけです。我々の日常的な用語法として。そして、地方というのは中央と取りあえずは結びついて、そして地域の独自性というものが失われていく。「地域の地方化」という言葉が、これはすでに1960年代あたりから使われてきています。地域の地方化というのは、大きな国の政策の中で地域開発ということが言われ、あるいは利島改造ということが言われる中で、この地域の固有性が見えなくなっている、あるいは地域が破壊されていると

いうことがあったわけです。

地域開発の問題

列島改造、あるいは地域開発が持っている問題性、これは現在ではゼネコン開発をどう考えるかという問題で今だって非常に重要な問題なのですが、私は手元にあった一冊の本を取り出して、読み直したのですけれども、これは経済学の宮本憲一先生、公害問題に非常に積極的に関わって、今は滋賀大学の学長をされている、この宮本さんが『地域開発はこれで良いか』という岩波新書をまとめたのが1973年です。この本は60年代、列島改造、そして地域開発で大きく日本の風景、いわば自然の風景も変わる中で、

つまりそれまでの白砂青松、きれいな水辺に突然大コンビナートが建っていく、そして公害を垂れ流していくという、そういうことを含んでのいわば自然の風景の変化も含めて開発が進んでいくわけです。この地域開発は果たして地域を豊かにしたのかということになるわけで、宮本さんが問うた問題もまさにそうなんです。地域開発という名の地域の解体、人間が根無し草になっていく、そういう問題を鋭く経済学の視点から指摘したもので、その目次を見れば大体どんなことを書いているかが見当つくと思うのですけれども、例えば「地域経済の変貌と現代的貧困」というのが第1章で、大都市化と都市問題、その次が過疎化と農民生活の変貌、そして、現代的貧困としての地域問題、これが第1章です。その次が地域開発のもとで公害問題がどのように起こってきているのか。宮本さんは公害問題にも積極的に取り組んだ研究者ですけれども、そしてその経済学の研究それ自体がいわゆるデスクワークではなくて、本当に地域の生活と深く関わるところで、それを立て直す経済学を作るにはどうしたらいいかということでご自分のこの学問意識を持って研究してきた経済学者なのです。

この中で列島改造案を批判しているのですが、ナショナルマクシマム化をすすめる列島改造の、中でシビルミニマムという言葉がこの頃からずっと使われるようになってきたわけですが、シビルミニマムというのは、ナショナルマクシマム、国をあげて最大利潤をどういうふうに追求す

るかということが開発の課題になり、その中で地域がいうなれば逆に収奪されていくというそういう構造をかえて、それぞれの生活基盤としての地域のミニマムな、シビルミニマム、最低限必要なものはなんなのかという、それを拠点にして地域を捉えなおすという、これが宮本さんの捉えかたでもあり、主張でもあったわけです。列島改造、それから巨大開発の中で地方自治の破壊が起こる。開発を担う第三セクターとは「権力とお金を持ったブルドーザー」のようなものである。住民の声がその開発に十分反映してない。それにストップかけるのは、住民の自治的な運動以外ないということも含めて、宮本さんは地域開発に問題提起をしているわけです。この問題は、ですから、今もまた課題として続いているのだというふうに言っています。

地域開発は公害問題と非常に深く結びついていたわけですが、最近では公害問題とは言わずに、地球環境問題ということがしきりに言われる。まさに環境問題は自分の住んでいる地域の公害ということだけではなくて、地球規模での汚染をどう考えるかということで考えなければいけないということは確かなことなんですけれど、もし足元の公害問題、あるいはその企業のあり方、そして農業のあり方も含めて、農業の問題も含めて、問うことなしに地球規模の環境が問題だというだけでよいのか、なんとなく地球時代の問題意識を持っているんだというふうに思うかも知れないけれども、やっぱり地域の問題、そして地域の公害問題も、その視点を抜きに地球汚染、地球環境問題だけを言ったのでは、これは実は問題を逸らしているに過ぎないということになるわけです。

これは、総合学習の問題を文部省がなにをモデルとして推奨しているかを見れば、非常によく分かる。環境問題、地球環境問題、これは文部科学省も結構大好きといいますが、総合学習の課題としては大いに強調をするのですけれども、しかし、地域開発、そして公害の問題、それは自分たちの生活環境そのものです。そこに目を向けるということを逸らすために地球環境問題を言っているというふうに邪推もしたくなるような構造になっているわけです。そして平和だとか人権とい

うようなものは、総合学習の課題にモデルとしてあげない、そういう問題があるのです。ですから、そういう問題を考える場合も地域ということが本当に大事になってくる。ようやく地域住民の意識もかなり高まってきていると思われますが、この辺は長野ではどうなのかということで、むしろ私はいろいろ伺いたいという思いを持っているところでもあります。

地方自治の本旨

それからもうひとつ、つまり経済政策というか、開発政策、列島改造策の他に、もうひとつ行政的な面で中央と地方の関係というものをどう考えたらいいかという問題があります。これはいわゆる戦前の国家主義的な枠組み、日本の近代化はまさに強力な国家を軸にして近代化が進められた。これは遅れて近代化、世界の、いうなれば流れに参加した日本としては国家主義的にならざるを得なかった必然性が、ある意味ではあるとも言えますけれども、そのいわば中央権力を軸にし、その背景には天皇権力があるわけですが、その元で地域の自治だとか、住民自治だとかいう考え方はまず全然ないわけです。中央の出先としての地方、その地方の行政は内務省が握っているということで、その内務省の所管の中には警察行政と教育行政が、重要な内容としてあったわけです。

その国家主義的な、いわば中央権力を主軸にした考え方の基では自治という考えは成立しないわけです。しかしその日本にとっての1945年、その大きな歴史的転回の中で国の仕組みも変わってくる。憲法が作られ、教育基本法が生まれてくるといことになり、地方自治に関しても、ひとつの新しい視点が提起されたと取りあえずはいうことができます。それは私たちの憲法92条、92条は地方自治について書かれている。「地方公共団体の組織及び運営に関する事項は、地方自治の本旨に基づいて法律でこれを定める」こうなっているわけです。これだけ読んでもたぶん皆さんどうということなのか、よくお分かりじゃないと思います。「地方自治の本旨」という言葉が私たちの憲法にあるわけです。しかし地方自治とはなんなのか。本当に自治の精神で地域の行政が行なわれてきた

かということ、なかなかそうはなっていないわけです。

実はこの92条に関しては憲法の制定過程、よく皆さんもご存知だと思いますけれども、日本国憲法の成立、これは1946年の2月の最初の週からGHQを中心に検討が始まり、マッカーサー・ノートが示され、そして、それを参考にしながら憲法案が作られていく、この筋があることはご存知のとおりです。その時に、このGHQの原案、マッカーサー草案ではその部分がこういうふうになっています。「首都の地域、市、町の住民は、法律の範囲内において彼ら自身の憲章を作る権利を有する」という表現なんです。主語は住民。そして住民は彼ら自身の憲章、チャーターを作る権利を持つ。この草案の精神というのは、まさに地方自治、地域の自治なんです。これはアメリカのいわば民主主義のひとつの、あるいは最も大事なところなんで、それが日本でも地方自治の原点として提起されたわけですが、これがさっき紹介したような憲法の文言になっているわけです。地方自治の主体が地方住民であるというその肝心の本旨が92条からすっぱり抜けてしまって、「地方公共団体の組織及び運営に関する事項は地方自治の本旨に基づいて法律でこれを定める」となった。この過程をみれば「地方自治の本旨」という言葉はあるけれども、その本来の自治の精神というものは、今の憲法をしても弱点をもっていると言わざるを得ないのです。

固有説と伝來說

これは実は自治というものをどう考えるか、地方自治を。この地方自治には二つの考え方があって、それは地域それ自体それぞれが固有の権利を持っている。そして固有の条例、チャーターを作ることができるという考え方で、自治の根拠の固有説というふうに行政法ではいうのです。その固有説的な地方自治観ではなくて、実はもうひとつの伝來說、伝来というのは伝え来るですね。どこから伝来するかというと、中央、国家から地方自治というのは伝来される。必要に応じて、つまり分権、権力を分かつというだけであって、それを握っているのは国なんだという発想です。これが伝來說というんです。

固有説か伝來說かということになると、日本のいうなれば地方自治はずっと伝來說で来たということがあるのです。戦前は勿論伝來說。戦前の憲法学説の中で、美濃部達吉、皆さんご存知の天皇機関説の主張者、帝国憲法の解釈としてはあの枠の中でもっともいうなれば国民の権利に近い方向で考えようとした人であり、そして、右翼に糾弾されることになるわけです。その美濃部行政学説も、実は自治体の権限というものを国に由来するというふうに考えていた。ちょっと読んでみますと、「すべて自治体は、国家のこれを認むるによりて初めて成立するものにして、国家以前に自治体あることなし」、国家以前に自治体あることなし、これがポイントです。国家の様々な事務も分配されるが、「所詮固有の事務といえども、また国家より委任されたるものにほかならず」と。「その区別を生じるは、もっぱら国家がその事務を委任する方法の異なるによるだけである。国家以前には自治体なし」。

ところで新しい憲法が生まれ、「地方自治の本旨」が書かれているんですけども、学説は実は美濃部学説をずっと継承してきたということがあるんです。戦後も行政法学界の重鎮である田中二郎氏、彼は戦後改革期には東大法学部の教授で、文部省で教育基本法の法文を詰める際に重要な役割を果たした人なんですけれど、彼が1960年代になって、戦後の自分たちの行政法の解釈というのは間違っているのではないかとという反省をしているんです。彼は東大の後には最高裁の判事になるんですけども、こういうふうに書いています。「戦後の改革変遷が極めて著しく、しかも今日までその変革過程が続いているためであろうが、我々学究の非力と怠慢のためもあるって、美濃部理論に代わるべき確固たる通説というべきものは、まだ形成されるに至っていない」というふうに反省をしている。美濃部学説とここでいっているのは、つまり伝來說。そこで固有説のもっている意味をもっと大事に考える必要があるのではないかとというのが、田中二郎さんの反省なんです。

その後、そういう方向で田中二郎の反省も含めて、行政法の中では自治の本旨を固有説に近いかたちでなんとか考えようという研究者たちも生まれてきているわけです。政治学では松下圭一さん

なんかもその一人になると思うのですが、それから長野大学の学長、井出先生もたぶんその発想をもっておられるのではないかと私は思っております。

固有説の根拠というのは、ヨーロッパの地方、地域の都市の歴史を見れば、地方都市のほうがいわゆる国家よりずっと前から歴史を持っているということがいくらかでもあるわけで、そういうところから見ると、都市こそが、あるいは地域こそがいうなれば生活の基盤。ですから自分たちで、自分たちの憲法を作ると、チャーターを作るといって、これが自治の精神。そういう歴史がある。日本でも、例えばそういう発想で日本の都市の歴史を見た場合に、堺が自治都市であったというようなことがよく言われます。明治国家になっては、そういう伝統も全く切れてしまうわけで、上からのいうなれば権限を委譲するに過ぎない地方であったわけです。こういう考え方が強く残っていたことは確かだけれども、しかし、考え方として地方自治の精神というものは、戦後のやはりひとつの精神になっていったことは確かなわけで、ですから例えば行政機構としても内務省が解体し、そして自治省になるという名称も変わってくるわけです。それぞれの自治体の責任と権限を大事にしようという流れも、この憲法の新しい解釈の動向を含めて動きがあるし、今はそれが広がっているというふうに言ってよいのではないかと、一方では。

しかし、他方では自治体の長に、自治省の役人が選挙で知事になっている。このところの選挙を見るとそうですね。やっぱり、そういう動きなんだ。つまり戦前は自治体の長は内務省の役人として知事も含まれていた。任命されていたわけです。実質的にはそういうものが依然として強いなあという思いと、にも関わらず地域によっては面白い知事さんも出てきている。長野県なんかもそうでしょうし、あるいは高知県の橋本知事もそうだと思うんです。だからひとつの可能性は含んでいる。そうするとやはり、そういう自治の精神を担う住民が、自分たちの本当に地域の住民としての主体性を持って地域をどう作るかという、そういう思いを深くもって、そして横につながっていけば、中央直結の行政でなければ地方は疲弊する

んだというような議論ではない筋が開かれつつある、と思うんです。

教育改革の問題にしても、地域に根ざす教育ということが、例えばちょっと先ほど小川さんが紹介してくれましたけれども、「日本の教育改革をともに考える会」などのひとつの方向性、それは地域に根ざす教育をどう作るかということで改革の軸になっているわけです。それと同時に地球時代に相応しい課題を担う、市民一人ひとりをどう育てるかということが課題になるわけです。

この地域の問題を、ですから少なくとも戦後史だけを取った場合にも、戦後改革、そして「憲法は変われども行政法は変わらず」という名言があるのですが、これはオットマイヤーというドイツの行政学者ですが、地方自治の本旨などまさにそういうかたちで、行政法的には地方行政のレベルでは古い物が残っているのだけれども、それが少しずつ変わる可能性もいまや見えてきたと言えるのではないかと。そして、分権化が上からもいわれる1990年代、この分権を中央の責任と権限を配分するというのではない自治、分権ではなくて自治で捉えなおす可能性も同時に見えてきている、そういう筋。それから経済開発政策はどこでストップがかけられるのか。本当に住民の生活基盤を豊かに、そして生活の質を見直すという、そういう視点を含んで開発を捉えなおすという、これは宮本さんが「開発による現代的貧困」といっているわけですが、そういう問題をどう克服することができるかというこういう課題になるわけです。

三、

長野では

長野県はそういう動きの中ではどういうことになったのだろうか。私はいうなればよそ者ですから、よく分かりませんが、列島改造の開発の波からすると、むしろそれにそのままずっと乗っていかなかったところがあるのではないかと。むしろ地域を大事にしてきた長野県の伝統があるのではないかと。

それは教育に関しても、例えば地域の生活、そして一人ひとりの権利としての教育を大事にするという発想があることは私は十分知っています

し、それはしかし、例えば東大への入学者の数ではどうもうまくいっていないんじゃないかということで批判もされる。その東大の入学者で教育の成果がはかれるという、そういうこと自体がつまり、いわば文化、教育を根絶やしにする発想だというふうに実は私は思っていますので、長野県の先生たちはそういう動きに対しても抵抗してきたことを知っています。

私は実は長野県の関係ということをしていいますと、よそ者であることは間違いありません。しかし、ある意味で非常に親しみを感じているひとつの地域なんです。それはどういう関係かといえますと、いろいろなことがあるんです。地域というもの、あるいは地域の伝統というもの、外からどういうふうに見られているんだろうかということ、そこに住んでいる人はあまり気が付かないとも思いますので、少しだけおしゃべりをしてみますと、例えば私は九州生まれ、九州育ちなんです。アルプスの雪山は本当に自分の生活経験からは遠いところですし、そういう意味のひとつのあこがれの地域でもありましたし、そして島崎藤村の「小諸なる古城のほとり」、そして千曲川というのは僕ら高校時代にはゆかしい思いがあります。そういうかたちで印象は作られているわけです。大学院に入って、勝田守一先生が私の先生ですけれども、蓼科に山小屋を持っていまして、そこで私は「思想」という雑誌に最初に「国民教育における中立性をめぐる問題」という論文を書きました。その時、勝田先生と共著なんですけれども、その仕事を蓼科の先生の山小屋でやったという記憶もよみがえってきますし、それから大学院の終わりには、私は胸を患って富士見高原で1年療養生活を過ごしたのですが、そこで1日の朝な夕な八ヶ岳、1年を通しての変化、これは私の青年期と重なって非常に強い印象を残しているわけです。それから大学の教師になった後、安曇野の研究会に呼ばれて、そしてそこで話しをしたこともありますけれども、その安曇野には礫山館の思い出があります。今ではちひろ美術館ができて、そこにも3年前に行きました。中央大学の教育学科では3年生のとき「実地研究」があり、これは学生が地域とテーマを決めて、教育問題の調

査をする。それで長野県を3年前に学生が選んで、グループに分かれて1週間調査をしましたけれども、私が同行したグループは「芸術と教育」というグループで、長野県のいくなれば美術館巡りのようなことをやり、そして地方に根ざす文化、文化はどういうふうに生きているんだろうかというような調査をしました。これも私には豊かな思い出になっているんです。小諸から上田、長野、それから松本、安曇野を回ったのです。

小諸の懐古園の入口のそばに小諸義塾がありますが、あの義塾の入口のところに詩がある。これは藤村の「別れ」という詩が刻まれているけれども、実はその「別れ」の詩に曲が付けられている。藤村の別れは姉と妹の別れですけれども、曲をつけたその人は学徒兵で友人を戦地に送る思いを重ねながらつくった。そのことが碑に書いてある。それが「惜別の歌」で皆さんもご存知だと思いますけれども、実は藤江英輔という中央大学の学生が作曲したんです。それでこの曲は中央大学の学生歌になっているのです。ですから一つのところを訪問し、いろいろな知識がつながるということは実に楽しいことです。いくなれば研修旅行で、学生たちと一緒に、学生たちはそんな話がよく知らないものですから、私は解説したりしながら、歌ったりしたのですけれども、そういう思い出があります。

私はただの思い出を話そうとしているのではなくて、その地域が証言しているメッセージというものをどう捉えるかという問題として、いま話もしています。碌山館に行けば、あの碌山、彼は、若くしてパリに渡り、ロダンについたわけです。長野の人というのは明治の末から随分開かれた、地域に根ざしながら世界へのまなざしを持っていた地域だなあと改めて思うんですけれども、藤村もそうですけれども、碌山もそうですよね。「白樺」もそうです。碌山館に行って、彼の文章を少し丁寧に見たんですけれども、碌山はパリへ行ってニューヨークへ、そこから父親に宛てた手紙がある、日露戦争直後なんです。ヨーロッパで新聞を見てると、日本が戦勝に浮かれて熱狂している。これはそんなことでもいいのか、自分は非常に心配だとそういう手紙を父親に送っているんです。僕は碌山館で少し丁寧にそんな書類を見る機

会があった。碌山はそんなことを考えていたんだなあと改めて思いましたし、さらに、芸術家たちのそういう感性というものをやっぱりすごいんだなあとこういうふうに思ったりもしました。

それから上田では山本鼎の記念館があります。山本鼎は若くしてやはりフランスに渡り、そしてロシア革命直後のソヴィエトを通して帰ってきた。そして農民芸術運動をはじめ、染色や、版画の中心的な仕事をした。これはこの地域だけでなく、また日本の版画運動、そして染色運動の中心になる人です。自由画運動ということで自由画教育ということで、教育史的には知られているのですが、この地に来て、山本鼎の仕事をもう少し深く見る。そうすると、この地域が実は世界とつながっているということも分かって来ます。

あるいはもう一人の山本宣治のことも関心をもって、知ることになるわけです。山本宣治は昭和のはじめ第1回の普通選挙に出て、治安維持法を批判し、それに触れて、彼も逮捕され、暗殺された。「山宣一人孤壘を守る」という言葉を残しています、別所温泉にある山本宣治の記念碑には「人生は短し芸術・科学は長し」とラテン語で書かれています。

そういうことを通して、この地域の人々が日本の歴史の中でどういう動きをしたのかということも分かってくるし、今の話に重ねて言えば、教育でいえば、いわゆる教員赤化事件が起こっているわけです。満蒙開拓に長野の先生たちは自分の教え子を随分送ったということで、ひとつの負い目になっていることも私は知っています。その満蒙開拓、なぜ満蒙開拓に長野の若者たちがたくさん入ったか。それは長野が貧困だったからです。これだけの説明で済ませているような人もいます。ですけど、そんなことではないわけです。勿論いわゆる日本の植民地拡大政策は国内の貧困問題の解決策として満蒙開拓をやったことも間違いはいけれど、しかし、長野の先生たちはなぜ多くの子供たちを送ったかということ、これは教員赤化事件の後、いくなれば国に対して忠誠心を一層顕示せざるを得なかったという、そういうこととも関わっての満蒙開拓だったんだと私は思っておりますし、戸倉上山田には満蒙開拓団の碑もあります。その開拓団の問題は、映画の「大地の子」と

そのままつながってもしるわけですし、あの「大地の子」にとってなぜ信濃富士が自分のいわば心の深いところで記憶として残っていたかという、そういう問題につながるわけです。

この地域の問題がそういう歴史と結びつき、そして現在の例えば日中関係としてもそういう問題が生きていると私は思っていますし、実は先々週、3月の末の週なんですけれど、この長野の高等学校の先生たちと中国へ一緒に訪問をする機会があったのです。小川さんも一緒にしたけれど、小川さんたち、そして長野の先生たちは長野県と中国の河北省、そして北京の中央教育研究所と交流をしています。その交流をもっと太いものにしようということで今度の訪中があったようですけれど、私もそれに顧問として同行をしたのですが、この訪中団の先生の中には中国語をやっている方が二人いました。いずれも国語の先生で、なぜ中国語をやっているか。長野県は満蒙開拓団へたくさん送っているわけですから、かつての残留孤児の家族で長野県へ帰ってくる青年が結構いるわけです。高校で受け入れる。日本の友人たちは冷たかったり、いじめたりすることもある。国語の授業のときに漢詩もやりますね。日本に帰ってきた青年に「これを中国語で読んでごらん」と指名すると、見事に中国語で読む。その周りの高校生たちも改めて彼のことを見直す。そういう経験をもっている先生、そういう先生が結構長野県にいらっしゃるんです。二人の先生もそういう経験を持っておられる。そういう方と一緒に中国へ行っただけです。ですから地域の問題というものが歴史につながり、そして現在の国際的な関係を見る場合にも、ひとつの非常に具体的な姿を通して見えてくるのが大事なんだということを、一緒に中国へ行っても感じたんです。

中国と私

それに重ねて中国と私の関係をちょっと補足しておきますと、実は私の父親は日中戦争が始まって、1937年ですけれど、召集されて中国へ行き、今度私たちが行った河北省、その保定が旧日本陸軍の根拠地でもあったわけです。父も確実に65年前その地を踏んだと思っています。実は父は獣医だったんですけれど、私が4歳のとき軍馬ととも

に召集され、6歳のときに小倉陸軍病院へ帰ってきて死んだのですけれど、父親が獣医であっても、とにかく侵略戦争の一員としてその地にいた、65年後に私は日中友好のためにその地に立っている。こういう思いがこみ上げてくるのを感じました。これは私の中の、いうなれば個人の体験がやはり歴史につながっているし、どういう歴史をどういうふうに自分で心に刻めばいいかという問題でもある。個人の問題、そして地域の問題というものがそれぞれ歴史につながり、世界につながっているという意識で物事を見るということは、非常に大事だという思いを私は持っているわけです。

さらに上田のことでいえば、私は上田がもうひとつ好きな理由は、信濃デッサン館があり、そして無言館もできたことです。信濃デッサン館、窪島誠一郎さんが作ったものではありませんけれども、しかしこの信濃デッサン館がやはり地域に支えられた非常にユニークな美術館であることは間違いないし、村山槐多の自画像は強烈な作品ですけれども、地域というよりも、まさに個としての人間の叫びでもあるわけです。そういう村山槐多の作品がある信濃デッサン館、村山槐多は山本鼎の甥っ子であった、そういう関係があることも知ったのですが、それに加えて無言館の印象というものは、これは3年前、学生たちと行って、まだできたばかりの頃で、本当に強烈な思いがあります。

無言館とスタバート・マーテル

無言館はまさに「無言」館だけれども、強烈なメッセージを出している美術館だというふうに思います。将来を期待されている若者たち、画学生が戦争で亡くなっていった、その作品を展示してあるわけです。実は私はいま合唱をやっているのですけれど、その合唱団では日本の歌もやっていますが、いまちょうどドボルザークのスタバート・マーテルというのをやっています。これは「悲しみにたたずむマリア」という題の曲で、ドボルザークは、皆さん「新世界」というのはよくご存知だと思いますけれども、彼は自分の子どもを次々3人亡くすんです、天然痘で。その自分の悲しみをこのスタバート・マーテルに込めて作曲

したんだそうで、随分時間をかけたようだけれど、これは悲しみに沈む聖母の歌。十字架に架けられたキリスト、その悲しみにたたずんでいるマリアを歌っている。そのマリアあなたの嘆きを自分にも分かちあってほしい。悲しみをともにしたのですと歌うのですが、無言館と「悲しみにたたずむマリア」これが結びついて、いま私の心の中にはある。無言館が発するメッセージ、それはいろいろありますけれども、その中には両親に宛てた手紙、母親に宛てた手紙があるわけです。それを受け止める母親の気持ち、それはスタバート・マーテルを作ったドボルザークの気持ちとも重なるのだなあとということを強く感じたんです。

ですからその地方からの発信という意味はいろいろな発信があるのだけれども、本当に国際的な、地域から国を貫き、そして世界に開かれていく、そういう地域の文化のあり方というものが私はあるのではないかと思いますし、この長野というのは、そういう意味でこの地の文化を見直した場合、実に豊かなものがあるのだなということを強く感じていまして。そしてそういう風に見直そうとすることが、その方法意識の自覚化を含めて重要だと思うのです。

松代からのメッセージ

そしてまた積極的なものだけでなく、否定的なものを媒介にしてのメッセージということも、それは若くして戦場に行くという、これもある意味ではそうですけれども、先ほどの満蒙開拓の問題もそうですし、あるいは松代の問題もそうです。朝鮮や中国から強制連行され、強制労働をさせられたその人たちの思いが松代には込められてもいるし、そのことを理解している松代の人たちが、韓国から連れてこられて松代の地下壕掘りの労働させられた、戦後も松代に残り住んだ崔小岩さんという方のお兄さんの娘さんを松代の人たちで受け入れて、留学の面倒を見たという話を聞いて感動したことを覚えています。実は1993年の1月、長野で行われた全国教研集会で記念講演をしたのですが、そのテーマは「地球時代の教育課題」でした。その時も演壇から崔さんのことや、松代の人々との留学生との交流についても話したのです。教研の参加者たちも松代の壕を訪

ね、旭高校の生徒が熱心に説明してくれたことを思い出します。

恐らくそれぞれの地域に固有の文化があり、そしてそれを支えている一人ひとりの人間と人生があり、それが発するメッセージが日本という国を貫き、アジアを貫き、世界へ開かれているような、そういう文化のあり方があるはずですし、地域から問題を考えるということは、そういうことなんだろうと思っています。ですから、そういう地域は、一方で中央と地方、他方で古い閉じた共同体としての、地域でもあったわけですが、そういうものでない地域ということになると、やはり一人ひとりが人間としての自覚をどこまで深めるかということになる。自立した個人、しかし、自立と孤立とは違うわけで、ひとは関係の中で、関係に支えられながら自立することもできるので。その関係にはその家族があり、地域の人間関係がありということだと思います。そういうやはり個人というのは非常に大事だと思うし、さきほどからふれてきたような芸術家たちだって、それぞれ強烈な個性をもった人たちです。それを支える地域があり、そしてそれが世界に開かれている。その開かれ方というのは、冒頭で申しました、いわゆるグローバリゼーションとはまったく逆方向、ベクトルが違うんだというふうに考えていいと思うのです。かつての「地域開発」とグローバリゼーションというのは、実は重なった動きなのではないか。それを串刺しに批判できるような視点というものを、私たちは持たなければいけないと思うのです。

そういうふうに見てみると、長野というのは実に面白いところだと私は思っています。私がいまあげたのは本当に一部分でしかない。まだあげればいろいろあると思うのです。佐久病院の若槻さんたちの活動や望月町の町づくりや吉川（望月）町長さんや、職人館のことなどお話ししたいことはまだあるのですが、所詮はよそ者、しかし多少とも親近感を持っている人間がどう長野県のことを見ているだろうかということで参考になれば、いいなあとと思っています。

私自身の故郷についても少し話そうと思ったけれど、もう時間がきましたので、これで終わりにしたいと思います。失礼しました。

(資料)

なぜ東アジアで教育・文化を考えるのか？

(長野高教組50周年記念事業、シンポジウム基調の問題提起)

小 川 勝 一

1) 私の内から呼ぶ声

私は、東京・足立区の生まれ。中学生の時である、担当の先生が出張し、授業が休みになった。補充の先生が本を読んでくれた。日本戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』である。冒頭の文章、上原良司（長野県、穂高出身）の遺書を読んでくれた。これは学徒兵の万感の思いが端的に表現され、期せずして同世代の悲劇的な運命の証言になっているものであった。私に強い影響を受けた。その後近所の古本屋で見つけて買い、あらためて読み直した。表紙を開くと絵が書かれている。関口清の絵である。この絵は上田の無言館（戦没画学生美術館）に収集されている。「なげけるか いかれるか はたもだせるか きけはてしなきわだつみのこえ」が、この本の基調になっている。その典型になっている詩がある。田辺利宏が書いたものである。田辺は大学を苦学して卒業、広島的高等女学校に就職（国語、英語担当）、4ヶ月にならずして従軍（1939年）。中国江蘇省北部で、左胸心臓部に受けた貫通銃創のため戦死（1941年）。26歳。

夜の春雷

はげしい夜の春雷である。
鉄板を打つ青白い電光の中に
俺がひとり石像のように立っている。
永い戦いを終えて
今俺たちは三月の長江を下っている。
しかし荒涼たる冬の豫南平野に
十名にあまる戦友を埋めてしまったのだ。
彼らはみなよく戦い抜き
天皇陛下万歳を叫んで息絶えた。
つめたい黄塵の吹きすさぶ中に
彼らをはこぶ俺たちも疲れはてていた。
新しく掘りかえされた土の上に
俺たちの捧げる最後の敬礼は悲しかった。

共に氷りついた飯を食い
氷片の流れる川をわたり
吹雪の山脈を越えて頑敵と戦い
今日まで前進しつづけた友を
今敵中の土の中に埋めてしまったのだ。
はげしい夜の春雷である。
ごうごうたる雷鳴の中から
今俺は彼らの声を聞いている。
荒天の日々
俺はよくあの掘り返された土のことを考えた。
敵中にのこして来た彼らのことを思い出した。
空間に人の言葉とは思えない
流血にこもった喘ぐ言葉を
俺はもういく度きいたことだろう。
悲しい護国の鬼たちよ！
すさまじい夜の春雷の中に
君たちはまた銃剣をとり
遠ざかる俺たちを呼んでいるのだろうか。
ある者は脳髓を打ち割られ
ある者は胸部を射ち抜かれて
よろめき叫ぶ君たちの声は
どろどろと俺の胸を打ち
びたびたと冷たいものを額に通わせる。
黒い夜の貨物船上に
かなしい歴史は空から降る。
明るい3月の曙のまだ来ぬうちに
夜の春雷よ、遠くにかえれ。
友を拉して遠くへかえれ。

私の中から通奏低音のように、「なげけるか いかれるか はたもだせるか」と呼んでいる声がある。おそらく誰でも通奏低音のように、内から私を呼んでいる声がある。そうした経験を持っていると思う。

2) 戦後にこだわる（新版『きけわだつみのこえ』の刊行にあたって）

『きけわだつみのこえ』は、新版として再編集

し、1995年岩波文庫として刊行された。刊行にあたって、今後の課題をあげている。「学徒動員によって戦争に駆り出されたのは、日本人学生だけではなく。当時大日本帝国の植民地であった朝鮮半島や台湾などの学生もまた「志願」の名のもとに事実上徴兵され、日本人の場合よりもはるかに酷薄な条件の中で極度に屈折した心情を抱いて、同じ戦争の渦中に投げ入れられた。彼らの手記や遺書は一篇も本書に収められていない。この落丁を埋めることは、植民地主義を反省し、アジアにおいても平和を揺るがぬものとして実現するための今後の大きな課題である。

読者の皆さんが、本書を読み進めるときに、日本側の死者だけでなく、アジア諸国や連合国の無数の死者たちのことにも想像力をめぐらせてほしいと願っている。また、日本軍隊の中の農民兵士をはじめ一般兵士、さらに非戦闘員でありながら殺された一般住民との関わりをも想い起こしてほしい。今までは当たり前のことと考えられるようになった「アジア人々への加害の意識」が薄いのはなぜか、ドイツの『白バラは散らず』に見られるような「戦争への抵抗の姿勢」が時とともに弱くなっていったのはなぜかについても考えてもらいたいと願っている。」（新版「きけ わだつみのこえ」p507）

韓国や中国の高校生は、日本の高校生の植民地支配、戦争について無知、無関心であることを知り、驚くことがあるという。今の日本の青年（そして大人も）には、こうした生きた知識（学力）、このような死者への想像力、一般的に言う他者感覚（他者と交流し、相手の身になって考える感覚）、そして抵抗の姿勢が、実に弱くなっている。現在、「有事法制」、教育基本法「改正」の問題を見ると、ここで挙げられた課題はきわめて重要なものであるだけではなく、われわれ教師の責任は重い。かつてないほど日中韓の政治、経済交流は活発になっている。それだけに東アジアを視野に歴史教育、平和教育を具体化すること、青年の深い交流が求められている。

3) 「大学改革」、「教育改革」に大きな分岐点に

日本帝国主義、軍国主義の土壤に教育・教育養

成があった。それゆえ、師範学校を戦後教育改革の柱としてあげられた。師範学校の閉鎖性を破り、教員養成の「開放性の原則」をあげることにした。そして大学における教養教育の中心として新しい大学、「学芸大学」、「学芸学部」がつくられた。しかし、教員養成を目的にする大学が必要であるとして、学芸学部（大学）はすべて「教育大学」「教育学部」に再編されることになった。その例外が「東京学芸大学」である（これも「東京教育大学」があるため、変更できなかったであろう）。そして時は流れ、少子化が進む中で、教員の「需要」を理由（学級定員の改善を行わず）に、「教育大学」「教育学部」の存在意義が薄くなってきた。学部の再編・改革の対象になった。そしてさらに再編され、一県一教育学部の原則が崩れ、教育学部自体喪失する県が出ることになった。

「大学改革」、「生き残り競争」、大学の「冬の時代」等の言葉がよく聞かれた。最近では「国際競争力」をつけるために、産学連携、合併・統合、「独立行政法人化」が必要であると言われている。「大学改革」に狂奔していると思わざるをえない状況である。他方大学財政の貧困はそのままに、大学の自治は形骸化している。こうした改革（実はリストラ）の中心に、教育学部、教育課程がなっている。それだけではなく、戦後の「大学改革」の歴史の中心になっていることが多い。

有名な政治学者、丸山真男は、日本の「歴史意識」の底流（執拗低音）を「次々と、なりゆく、勢い」と表現された。「大学改革」（「教育改革」）の動向を見ると、まさに「次々と、なりゆく、勢い」に流されている、と思われる。これは「大学改革」だけではない。明治維新以降、脱亜入欧、富国強兵、殖産興業が国家の大方針になっていた。この「国の勢い」、国勢論は我々には深く浸透している。戦後の「文化国家」「平和国家」は今や忘れ、対米追従「貿易立国」「技術立国」といわれ、最近では「グローバリゼーション」「IT立国」などといわれている。「次々と、なりゆく、勢い」を抑える根源的なもの「原理」が弱くなっている。日本が世界に宣言（約束）した憲法、平和主義、基本的人権の確立は、その前提として「教育基本法」を制定したものである。ところがそれ

を現在「改正」しようとしているのである。有名な哲学者、中村雄二郎は、現代を見て、今こそ言わねばならない、「正念場」に立たされていると言っている。「われわれ日本人の場合、＜浮躁軽薄＞つまりムードに弱く軽はずみであること、および＜薄志弱行＞つまり意志が弱く実行力に欠けていることにこそ深い病根がある、ということである」。そして身についたほんとうの「哲学」が求められていると。

4) 復性復初を

1960年、安保闘争のとき丸山真男は次の話をした。「復性、復初というのは、ものの本質にいつも立ち返り、ことがらの根源にいつも立ち返ること

である。そしてこの初めにかえれと言うことは、敗戦の直後のあの時点にさかのぼれ、8月15日にさかのぼれということでもあります。私たちが廃墟の中から、新しい日本の建設と言うものを決意した、あの時点の気持ちと言うものを活かして思い直せということでもあります。」

「国破れ、山河あり」との感慨を持ち、新しい日本の建設、基本的人権の確立、民主主義、平和主義、生活の向上に大きな希望を持ってきたと思う。

高教組50年、東アジアを視野に、地域から復性、復初の思い・感動をよみがえることは大事ではないでしょうか。